

## 雪氷研究大会 (2009・札幌) 企画セッション

## 「防雪林 ～未来へどう引き継ぐか～」の開催報告

Report of the Project Session 'Snowbreak Woods  
- To Take Over the Future -'

in JSSI and JSSE Joint Conference on Snow and Ice Research -2009/Sapporo

伊東靖彦\*<sup>1</sup>・阿部修\*<sup>2</sup>  
Yasuhiko Ito Osamu Abe

## 1. はじめに

(社)日本雪氷学会と日本雪工学会の合同主催の「雪氷研究大会(2009・札幌)」では、地域や分野の抱える雪氷関連の個別課題について十分な議論を行う「企画セッション」が設けられた。この枠で著者は、「防雪林～未来へどう引き継ぐか～」(以下、セッションと記す。)を企画した。

セッションは大きく2部構成とし、セッション前半では北海道の防雪林の現状や課題について、各機関を代表する3名の方から講演いただいた。また、アドバイザーとして2名の森林専門家から助言いただいた。

セッション後半では、会場全体で、防雪林の課題について整理・討議を行った。本セッションの参加者は44名であった。

## 2. 講演

セッション前半では以下の5名の方から講演していただいた。

## (1) 鉄道防雪林～未来へどう引き継ぐか～

北海道旅客鉄道株式会社鉄道事業本部 小澤直正

## (2) 北海道開発局における防雪林の整備と今後の課題

北海道開発局 建設部道路維持課 河上聖典

(代行：伊東靖彦)

## (3) 北海道の高速道路における防雪林の現況と問題点について

東日本高速道路株式会社 北海道支社 田村奈津子

## (4) 防雪林の気象害

北海道立林業試験場 森林環境課 鳥田宏行

## (5) 防雪林の課題

環境林づくり研究所 斎藤新一郎

各機関の防雪林担当者からは、それぞれの防雪林の現況、これまでの経緯、林帯の構成、今後の課題と、いずれも短い時間で講演をお願いすることになったが、簡潔に講演していただいた。

この中では、特に適正な初期植栽密度について、会場の聴講者も交えて活発な議論が行われたのが印象的であった。

また、森林専門家からは植生基盤整備の重要性について指摘があった。

いずれも樹木の生長に対応できるように計画せねばならず、生きた樹木を用いた施設の困難さを改めて感じたところである。

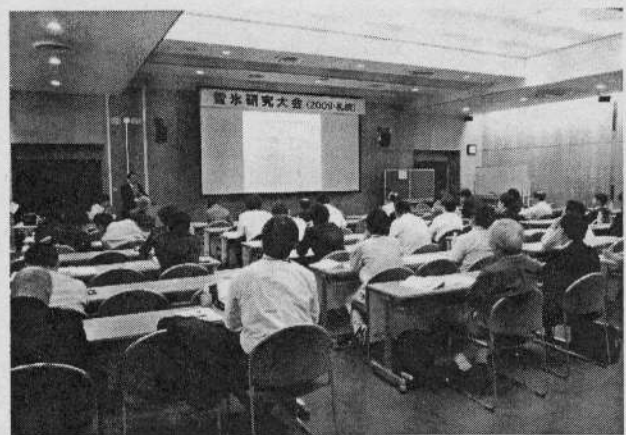


写真1 講演時の状況

\*1 (独)土木研究所 寒地土木研究所

\*2 (独)防災科学技術研究所 雪氷防災研究センター 新庄支所

### 3. ワークショップ

セッション後半では、会場全体を巻き込んだワークショップ形式で、防雪林に関する課題について意見の集約・整理を図った。司会は著者・伊東が務めた。

まず、参加者各人に付箋紙を数枚配布し、防雪林の課題について、例えば、「人材不足」のような短いキーワードで、書き入れてもらった。次に、予め7つの分野（理念、計画、設計、施工、維持、体制、その他）を見出しとして貼り出したホワイトボードに、記入者自らが書き入れた付箋紙を貼り付けてもらった。参加者から寄せられたキーワードを記した付箋紙は100枚余りとなり、防雪林について多くの課題が見出された。

さらに司会から、キーワードの意図やその背景を記入者に聞きながら、あるいは会場からコメントを交えて、防雪林の課題について情報や意識の共有を図った。

この方法では、まず各人が付箋紙に書き込むことによって、頭の中の意見を整理することになるので、意見が個人個人でまとまって出やすくなる。また、付箋紙を見ながら、全く無作為に意見を聞かれることになるので、普段あまり発言のない参加者でも意見を表明しやすく（せねばならなく）なるなど、声の大きい人に左右されず、幅広い意見を集めることができる。このワークショップでもその通りとなった。

加えて、予め付箋紙を配り、書き込んだものが会場内に張られるため、途中で退席されたり、お休みになる方がいないのも、司会、企画者にとっては意外なメリットであった。

学会大会で、あるいはこれほどの大人数によるワークショップは、著者にとっても初めての経験であったが、終了後参加者からは「斬新なスタイルで楽しかった」とか、「もう少し時間がほしかった」など、好意的な意見が多く、開催前の心配は杞憂に終わってホッとしている。KJ法によるワークショップ形式が学会内のブレインストーミングにも十分応用が利くといえよう。

このセッションで集まった課題は、設計・計画から技術の伝承、あるいは防雪林のあり方まで多種多

様なものとなった。なおこれら防雪林の課題については、本号別記事でまとめたので、合わせてご覧いただきたい。

ワークショップは、会場が使える限界の15分オーバーで進行したにもかかわらず、いただいた全ての意見を会場内で紹介し、あるいはコメントいただくことができなかったのが残念であった。

防雪林についての課題が深い内容を含むため、一つ一つの課題について内容を聞くだけでも、時間が掛かってしまい、またコメント等も含めて議論が白熱したためであるが、全体の時間配分についてはもう少し確保すべきであったと反省する次第である。



写真2 ワークショップの状況(1)



写真3 ワークショップの状況(2)

### 4. おわりに

最後にセッションに参加され、意見いただいた皆様に感謝している。次回大会などで引き続き議論できる機会を持ちたいと思う。